私とカエルの王子様

Rail

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私とカエルの王子様

【Ｎコード】
Ｎ２８８７Ｓ

【作者名】
Ｒａｉｌ

【あらすじ】
私が小学生のころ、近所の森に小さな泉があった。
これといった伝説は聞いたことはなかったが、その泉はいつ見ても大きなカエルが一匹浮いていた。
――少女とカエルの友情話。

私が小学生のころ、近所の森に小さな泉があった。
これといった伝説は聞いたことはなかったが、その泉はいつ見ても大きなカエルが一匹浮いていた。私が近付くとカエルはそのぎょろりとした目を私に向けた。そして何かを期待するようにじっとこちらをみつめるのだった。私はその視線が何だか気味が悪くて、いつも視線をそらしていた。
ある時私は手まりを貰った。母方の祖母が一針一針縫ってくれた代物で、今時こんなもの、と最初は顔をしかめたものだった。
しかし何の気なしに手まりを放っては受け止め、放っては受け止めをしていると、それが癖のようになってしまった。
最初は近所の公園でやっていたが、どうにもこうにも人の視線が気になって仕方がない。ひそひそ話が聞こえてくるような気がして、私はたまらない気持になった。
そうして逃げるように、私は森へと足を運んだ。今にして思えば、どうしてそこまで手まりにこだわっていたのだろうかと不思議に思う。
さて、うっそうとうと茂った森では、手まりを投げるとすぐに枝にぶつかってしまった。手まりを高く放れるところを探しまわって、ついに見つけたベストスポットは泉のそばだった。
毎日のようにそこに通って、ポンポンと手まりを投げる。カエルはやはり毎日そこにいて、私のそんな様子をじっと見ていた。見られているとなんだか張り合いが出てきて、こんなにうまくできるんだとわざと高く放ったりした。
そうして毎日会っているせいか、それまで気味悪く思っていたカエルが、なんだか友達のように思えてきた。手まりを放りながら一人カエルに話しかけたりもした。丁度そのころ、グリム童話だったかカエルと金の毬という話を読んでいたので、そのこともカエルに

聞かせたりした。カエルが人間だとはちっとも思ってはいなかったけれど。
ある日のことだ。いつものように手まりを放っていると、どうしたことか手元を狂わせて手まりを落としてしまった。
手まりはてんてんと跳ねると、小さな泉に飛び込んでいった。おかしなことに、手まりは水を吸ってずんずん沈んでいって見えなくなった。小さな泡が一つ浮いたっきり、浮いてくる気配は全くなかった。
これは困ったことになったと頭を抱えた。何しろ泉は小さいくせに、底が案外深いという噂なのだ。それでもやれるだけやってみようと私は袖をまくると、泉に浮いているカエルに一言断って、底が見えない泉に手を突っ込んだ。
しかし私の手は水とぬるりとした水草をほんの少し撫でたばかりで、手まりらしきものには触れることすら叶わなかった。祖母のまごころこもった贈り物をなくすのは何とも罰あたりだ。
途方に暮れた私はいつものようにカエルに話しかけた。
「カエル君、困ったことになったよ。手まりを落としちゃった。手も届かないし、どうしよう」
するといつもは黙って私の話を聞いてくれていたカエルは、おもむろに口を開いた。
「おやおや、手まりはそんなに大事なものだったのかい」
元々夢見がちだと子供ながらに自覚していた私だが、ついに自分が現実と空想の区別もつかなくなったのかと思った。喋るカエルなんて生まれてこの方出会ったことがなかった。
それでも彼は私が毎日話しかけていた友達であったので、そうか、ならば返事をしてもおかしくないと思いなおした。
「うん。大事な品だよ。おばあちゃんがくれたんだ。この世にたった一つしかないものなんだよ」
落ち込んだ私が水面を見ていると、カエルは水をぱしゃりと弾いた。

「なら僕が拾ってきてあげよう。その代わり、君は僕に何をくれる？」
学校で聞いたギブアンドテイクという言葉が浮かんだ。カエルでも例外ではないらしい。
ポケットの中に手を突っ込んでみると、いくつかの品物が入っていた。
ねり消し、クリップ、綺麗な石、ボトルキャップ、蛇の抜け殻。それらをカエルに見せて見たが、カエルは不満そうにゲコと鳴いた。
「そんなものしかないのならいいや。でもそうだなぁ、もし君が僕を好きになって仲良しの友達になってくれるんなら、拾ってきてやるよ」
私は二つ返事でうなずいた。なぜなら私と彼はすでに友達だったから。
カエルはすぐに頭を引っ込めて水中へと潜っていった。しばらくすると水をかき分けながら浮いてきて、口には手まりがくわえられていた。陸上に上がった彼はそれを草の上に落とすと、得意そうにゲコと鳴いた。
「さあ、僕を君んちに連れてきな」
そうしてその日からカエルと私は正真正銘友人となった。
私はカエルを家に連れて帰った。友達なんだと言えば、最初は悲鳴を上げた母も、渋い顔をしながらもカエルを家に入れることを許してくれた。カエルは母の前では喋らなかった。
カエルは思いのほか物知りだった。しかし彼の話には常にウソとホントが混ざっていた。
「僕は悪い魔女に呪いをかけられたのさ。本当は背の高い王子様なんだ。満月とあと百回挨拶したら元の姿に戻れるのさ」
と、そんなことを言ってはゲコと喉を鳴らしたのだった。
日本に王子様はいないよという突っ込みを私はすんでのところで飲み込んだ。
一つのお菓子を二人で半分こしたりもした。

「カエル君、君は病気を持っていたりしないよね？」
ふと先日見たテレビの影響で衛生的観念から不安になって問えば、カエルは不快そうにゲコリと鳴いた。
「僕は育ちのいいカエルだから大丈夫さ」
夜はタオルで寝床を作り、同じ部屋で寝た。タオルの下にＢＢ弾があった翌日には、彼の体中にあざができていた。なるほど、グリム童話は本当だったのだなと驚いたものだ。当然カエルからは散々怒られた。それにを謝りつつも育ちが良いというのは本当なのだなと感心したものだった。
彼とはよくすごろくで遊んだ。カエルの割に彼はとても器用で、ぽいとさいころを投げてはやたらと運が悪いせいで振り出しに戻るというマスに止まっていた。呪われているから運が悪いのかと尋ねれば、カエルは不機嫌そうに黙ってしまった。
何週間か一緒に過ごした。なかなか悪くない関係だった。おりしも夏休み、友達のいない私には最高の夏となった。
だけどもある日、どうにもむしゃくしゃしていた私はカエルと喧嘩になった。
理由は今はもう思い出せない。それぐらい下らないきっかけだった。
「カエル君なんて大っ嫌い！」
最初に出会った森の中で、私はカエルを思い切り投げた。ちょうど投げた先には木があって、幹に思い切りぶつかったためかひしゃげたような音がした。
重力に従ってカエルは落下した。その瞬間、カエルが死んでしまったかもしれないと思った。自分が友達を傷つけ、取り返しのつかないことをしてしまったと恐くなった私は後ろも見ずに逃げ出してしまった。
その夜、一人で眠るのはとても寂しかった。
次の日、カエルの様子を見に行こうと出掛ける支度をしていた私は、母によって行く手を遮られた。

やけに恐い顔をした母は、そのまま私をバスで二時間かかる母の実家へと連れて行った。離婚がどうだとか親権がどうだとか当時の私には難しい話を聞かされて、ちゃんと理解が出来ない私に母は噛んで含めるように説明した。要するに、父とはもう一緒に暮らせないのだと。夏休み明けに転校するようにすでに手配もしていたらしい。カエルのことが一気に頭から吹っ飛ぶくらいの衝撃だった。

離婚の原因は父の家庭内暴力だったらしい。らしいというのは、防衛本能なのだろうか、私は父のことだけ全く覚えていないのだ。私の幼少期の記憶は、母とカエルと学校がほとんどだった。

とかく、父の家庭内暴力に命の危機を覚えた母はほとんど逃げるように家を出た。母の実家は都会にあって、近所には森なんてなかった。

夏休みが終わると、新しい学校に通うことになった。幸運なことに、私は新しい学校で友好的に迎え入れられ、友達もできた。カエルのことは記憶の隅へと追いやられていった。ただ私の心の底には、友達にひどいことをしてしまったという後悔だけがずっと残り続けていた。

小学校を卒業し、中学校を卒業した。高校は第一志望に落ちた。辛うじて受かった第二志望の学校は電車で一時間かかるところにあった。そこへの路線は最近開通したところで、新興住宅地が多い中、まだかつての田舎風景を残しているところが多かった。

入学して一カ月、学校の授業が憂鬱になって早退した。そのまま家に帰るのも嫌だった。

私は学校からの帰り道、駅とは反対方向の曲がり角に足を向けた。気の向くままに歩いていけば、道の先に小さな森があった。まるで開発の波に取り残されたようにぽつんと佇む森に、私は足を踏み入れた。

森の中心部にぽっかりと開けた場所があり、そこに小さな泉を見つけた時、私はそこがかつてカエルと知り合った森なのだと気付い

た。泉の底は、今の私ならばなんとか手が届きそうに見えた。思っていたよりもずっと小さな泉だった。カエルは浮かんでいなかった。私がカエルを投げたのは、確かこのすぐ近くだった。
私は泉の淵にあったカエルがよく座っていた石を撫でると立ち上がった。
彼をぶつけた木は、泉のすぐ後ろの木だったはずだ。
あれからもう何年も経っていると分かっていても、振り向くのには勇気がいった。
そうして逡巡してから私は振り向いた。
「やあ、君。学校はサボったのかい？」
心臓が止まるかと思うほどの衝撃を受けた。
先ほどまで人の気配がなかったはずのそこには、背の高い少年が立っていた。
姿かたちも声も違うけれど、私がよく知った口調だった。
己の想像がにわかには信じがたくて、それでもそうなのだと直感で確信していた。鼻の奥がツンとして、いろんな感情が交じって胸が一杯になった。
「うん、ちょっと気分がよくなくて」
震える声で、私は返事をした。
かつて私が彼によくそうやって見せたようにひょいと肩をすくめると、彼は小さく喉を鳴らした。笑う時の彼の癖だった。
私は泣き笑いになりながら彼に言った。
「呪いは解けたんだね」
「うん。ついさっき、君がこの場所に戻ってきた時にね」
言いながら、彼は私へと歩み寄ってきた。長い長い年月を埋めるように、ゆっくりと。
それはまるでおとぎ話のラストシーンのようだった。
「ファンタスティックだね、カエル君」
私がそう言うと、彼はちっちと人差し指を左右に振った。
「こういう場合はロマンティックと言ってほしいな。それに、僕は

もうカエルじゃない。王子様だよ」
「白馬に乗ってないから認めない」
私が意地悪く言えば、彼は眉をハの字にした。
そんな彼を見ていると、自然と言葉がこぼれた。
「あの時はごめん」
彼は少しばかり目を丸くしたが、すぐに笑顔になった。
「僕もあの時は言い過ぎたよ。ごめん」
そう言って彼は私の手を取った。
「仲直りの握手！」
もう小さな子供でもないのに、どうしてか私達にはそれがピッタリなように感じられた。
「うん、仲直り」
そうやって私たちは笑みを交わした。
昔のように彼を抱えていくことはできなかったけれど、私達は手をつないで歩きだした。そうして私はそのまま彼を家に連れて帰った。
友達だと紹介したら母は僅かに眉を上げたが、家に入れてくれた。
久しぶりにすごろくをしてみたら彼はやはり運が悪くて、振り出しに戻ってばかりいた。
そんなくだらないことがおかしくて、私達はケラケラと腹を抱えて笑った。
彼が私の王子様となるのは、それから間もなくの話。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2887s/

私とカエルの王子様

2011年4月11日21時10分発行